　　　　　　　　　　　Chapter1－1

今年の桜も咲き、春が来た。[r]

オレは霞ヶ丘高校の二年生に進級する。[p]

９歳の頃に起きたあの事件以来、

[l]オレは幼馴染の光以外と新しい関係を[l][r]

築くことはなくなった。[p]

あの時から、代り映えはしないが、平和な毎日。[r]

けれど、今年は今までとは何かが違うような、[r]

何かが大きく変わってしまうような、[p]

漠然とした不安をオレは感じていた。[r]

いつもの通学路を見上げると、あの時のように、[r]

不気味なほど綺麗な桜が、オレを見下ろしていた。[p]

＃光

「おーい！蛍！」[p]

：ここでキャラ表示

＃蛍

「ああ、光」[p]

＃光

「クラス替え、どうだった？オレは、A組だったんだけど。」[p]

＃蛍

「オレは、B組。っていうことは、別々だな。」[p]

#光

「そうか…。クラスがお前と別になるの、初めてだな。」[p]

＃蛍

「…心配なのか？」[p]

#光

「心配だよ。お前、オレ以外に友達つくろうとしないから…」[p]

＃蛍

「大丈夫だって。友達なんてお前以外に必要ないし…」[p]

＃光

「はぁ…。」[p]

光は大きくため息をついた。

モブ先生「それでは、みなさん、自己紹介してください」[p]

教室に入ると、既に新学期の自己紹介がはじまっていた。[r]

田舎のそんなに大きくない高校のはずなのに、[l][r]

クラス替えをした途端見たことのない顔ばかりだ。[p]

…それともオレが覚えていないだけか。[p]

モブ先生「遅れて入ってきたそこの君、名前は？」[r]

＃蛍

「雨宮蛍です。」[p]

＃モブ先生

「雨宮くんね、君の席は窓際のそこの席だよ」[p]

好奇の目で見つめるクラスの連中の視線をかわし、[r]

オレは先生が指し示した窓際の席に座った。[p]

　　　　　　　　　　　　　　Chapter1－2

新しいクラスでの顔合わせという気怠いイベントを終え、[r]

オレは隣のクラスに向かった。[p]

無造作に開かれた扉の前に立つと、[r]

光が新しくできたと思われる友人達と楽しそうに話していた。[l][r]

（これは、邪魔しちゃ悪いよな…。）[p]

ボーッとA組の教室の前で突っ立っていること早一時間、[r]

光からの着信を知らせ、スマートフォンが震えた。[p]

#蛍

「もしもし。」[p]

＃光

「あ、蛍？もう顔合わせ終わった？今どこにいる？」[p]

#蛍

「今？A組の教室の前にいるけど…。」[p]

#光

「は！？それならそうと早く言えよ！」[p]

#蛍

「いや、だって、お前友達と話してたから……」[p

#光

「そんなの、お前に比べたら…」[p]

光がなにか言うが、急に接続が不安定になり、通話が切れる。[r]

スマートフォンをスラックスのポケットにしまった瞬間、[l][r]

A組の右端の扉が開いた。[r]

中から、光と、A組だと思われる女子が出てきた。

#光

「帰るぞ、蛍。」[p]

＃モブ女

「光くん！これから皆でカラオケに行くんだけど光くんも…」[p]

＃光

「ごめん、オレ、こいつと帰るから」[p]

光がにこやかに笑って断ると、女子が頬を染めた。[r]

俗にいうイケメンに分類される光の笑顔に中てられた女子が、[l][r]

教室の中に慌てて戻ったのを確認し、オレと光は無言で歩き出した。[p]

廊下を歩くだけで、女の子たちが振り返る。[r]

もちろん皆が見ているのはオレの幼馴染だ。[p]

光はいつものようににこやかに歩いてはいるが、オレには分かる。[r]

今、コイツの機嫌がすげぇ悪いってことが…。[p]

校門を出て、河原にかかる橋を渡ったところで足を止める。[r]

後ろを歩いていた、オレよりも一回り大きい影も[l][r]

同時に止まったのが見えた。[p]

＃蛍

「……お前、さっきから何怒ってんだよ。」[p]

＃光

「やっぱ、蛍には分かるんだな。」[p]

＃蛍

「当たり前だろ。何年一緒にいると思ってんだよ。」[p]

＃光

「10年だな」[p]

ザアアアアアア、と風が吹いて散りかけた桜の花弁が舞った。[r]

光が橋の欄干に肘を置き、川の先に沈む夕陽を眺め、目を細める。[l][r]

オレ達が出会った10年前も、こんな風に花びらが散っていた。[p]

あの頃の自分と、今の自分、別人のように変わってしまった。[r]

でも、隣に光がいる、それだけは変わらない。[p]

#光

「無理するなよ。何かあったらすぐオレに言ってくれ。」[p]

＃蛍

「…ありがとな。けど、大丈夫だ。オレはお前以外の友達なんて[r]

いらないし、もう誰も信用しない。もう誰も好きにもならない。」[p]

#光

「だから、心配なんだろ。」[p]

#蛍

「今までそれで生きてこれたんだ。これからだって…。」[p]

＃光

「…なんか、悪い予感がするんだ…」[p]

光が細めた目をゆっくりと開いた。[p]

＃蛍

「…そろそろ暗くなってきたし、帰ろうぜ」[p]

オレがおもむろに歩き始めると、光も無言で歩き出す。[r]

いつの間にか日が沈み、電灯がぼんやりオレ達を照らしていた。[p]

　　　　　　　　　　　　　Chapter2－1

チュンチュンチュン…[p]

チュンチュンチュン…[p]

#蛍

「んあ…」[p]

窓の欄干にとまったスズメの高い鳴き声で、[r]

オレは目を覚ました。[p]

＃蛍

「…………………眠い」[p]

＃光

「おーい！起きてるかー！？」[p]

窓の外から、光の声が聞こえる。[p]

＃蛍

「……………起きてる」[p]

立て付けの悪い、ぼこぼこのガラス戸をガラガラと開け、[r]

顔を出すと、下に見える人影に返事をした。[p]

#光

「早く顔洗って着替えて降りてこいよ」[p]

＃蛍

「…まだ登校するには時間が早くないか？」[p]

＃光

「バカ。蛍、お前、今日から朝は図書委員の仕事があるんだろ」[p]

＃蛍

「そういえば…」[p]

クラスの顔合わせの時、新学期からの学級委員が無事決まり、[r]

自分にならなくて良かった、なんて安心してたら、[p]

運悪く学級委員になってしまった同じクラスの山田くんが、[r]

運悪く新学期が始まる前に交通事故に合い、[l][r]

運悪くその役目がオレに回ってきてしまったのだ。[p]

#蛍

「…………完全に忘れてた」[p]

#光

「でも、結局引き受けるんだから、蛍は優しいよな」[p]

＃蛍

「………別に。アイツ、本当に困ってたし、しょうがないだろ」[p]

#光

「そういうところが優しいんだよ」[p]

#蛍

「そうか…？[r]

あ、そろそろ行かないと間に合わなくなる…」[p]

時計を見ると、針が7時０分を指していた。[r]

学級委員の仕事は、クラスの皆が登校してくる前に黒板を[r]

綺麗にしたり、朝のホームルームで配布するプリントを[r]

職員室まで取りに行ったりすることだ。[p]

どう見ても単なる雑用係でしかないが、[r]

こんなものでも決まれば最後、[r]

毎朝７時30分までには学校にいなければならない。[p]

ここから、高校までは歩いて30分ほどかかる。[r]

オレは鏡で自分の姿を確認して、家から急いで飛び出した。[p]

　　　　　　　　　　　　Chapter2－2

霞ヶ丘高校　AM7：30

早歩きで来たお陰か、７時30分にはなんとか高校に着いた。[r]

田舎の高地に建っているせいか、[r]

薄いモヤのような霧が目の前を隠すように高校を覆っている。[p]

#蛍

「光は野球部の練習があるんだっけ？」[p]

＃光

「ああ。オレは校庭の方に行くから、[r]

お前は学級委員の仕事、頑張れよ」[p]

下駄箱の前で、校庭に向かう光と別れた後、[r]

オレは早速学級委員の仕事をこなすために、[r]

職員室へと足を進めた。[p]

#蛍

「しつれいします……」[p]

木造の古びた扉をゆっくりと開けると、[r]

新学期のはじまりを感じさせる慌ただしさで先生たちが、[r]

忙しそうに職員室内を動き回っている。[p]

＃蛍

「すみません。２年Ｂ組の担任の先生はいらっしゃるでしょうか…」

＃瞭

「2年B組？私が今年度から受け持つクラスだな」

#蛍

「２年B組の学級委員になりました、雨宮蛍といいます。

よろしくお願いします」

＃瞭

「あぁ、新しい学級委員か。よろしくな」

＃蛍

「今日配るプリントとかってありますか？」

＃瞭

「あぁ、そこにある私の机に上に置いてある。取って行ってくれ」

＃蛍

「分かりました」

先生の机の上に置いてあるプリントを人数分数え、職員室を出る。

出ようとした、その瞬間、

＃千秋

「キャッ！あぶな…」

＃蛍

「…！」

職員室を出た瞬間、金髪の女の子にぶつかった。

受け取ったばかりのプリントは、かろうじて落としてない。

＃千秋

「痛…」

＃蛍

「大丈夫か…？」

オレにぶつかって、倒れてしまった女の子に手を差し出す。

が、女の子はオレの手を受け取らず、立ち上がる。

＃千秋

「大丈夫、ですから！…失礼します」

素っ気なく返事をすると、職員室の中に入っていった。

この時間に職員室に来るということは、同じ学級委員だろうか。

教室に行き、プリントを配る。あとは適当にぼーっとしていると、

いつの間にか昼食の時間になっていた。

昼食は、いつも光と食べている。

＃光

「いたいた、蛍。お昼、今日はどこで食べようか？」

いつも通り、教室のドアの間から、高身長の男がひょいっと顔を出す。

＃蛍

「…中庭とかでいいんじゃないか？」

＃モブ

「おーい！雨宮くん！」

教室から移動しようとすると、クラスメイトのモブに呼び掛けられる。

＃モブ

「今日のお昼の時間、学級委員の集まりがあるらしいぞ

先生に、雨宮くんに伝えろって言われて…」

＃光

「それって、どこの教室？」

＃モブ

「114教室だってさ」

＃光

「そう。ありがとう。」

光はモブににっこり笑ってお礼を言うと、歩き出した。

＃光

「114教室まで送って行くよ。さ、行こう」

＃蛍

「いや…一人で行くけど…。恥ずかしいだろ…」

＃光

「まぁまぁ」

そう言って、光が隣を歩く。

こいつは昔から、オレに対してとても過保護だ。

そんなところに、助けられることも多いのだが。

114教室に着くと、出遅れたのか、もう既に委員会が始まっていた。

空いている席に適当に座ると、隣の席に座っていた女の子が、

視線をこちらに向ける。

＃千秋

「あなた、さっきの……」

＃蛍

「あぁ、やっぱり学級委員だったのか」

三年生の学級委員が黒板の前に立って、話し始める。

しばらくすると、自己紹介が始まった。

＃蛍

「今年度から、学級委員になりました、２年B組の雨宮蛍です」

#千秋

「1年B組の有栖川千秋です。よろしくお願いします」

自己紹介が終わると、今後の学級委員の説明がある。

時計を見ると、休み時間が残りわずかしかなかった。

（最後まで出てたら、弁当、食べる時間なくなるな…）

まだどこかのクラスの学級委員が話しているのが視界に入ったが、

気にしていられない。

光と昼食を食べることの方が大事だ。

＃千秋

「…、あの、どこいくんですか…」

＃蛍

「どこって、弁当食べに行くだけだけど」

＃千秋

「だけって……。まだ委員会途中なんですよ？」

＃蛍

「別に……。いいだろ、それぐらい」

＃千秋

「駄目ですよ！ただでさえでもわたしと先輩はパートナーなんですから！

勝手なことは困ります！」

＃蛍

「……パートナー？？何のことだ？」

＃千秋

「はぁ…窓の外ばっかり見てると思ってたら、やっぱり話聞いてなかったんですね…」

「6月の文化祭に向けて、学級委員ではもう仕事を始めないといけないんです。

それで、効率良く仕事を消化するために、先輩と後輩で、パートナーになって協力して

仕事を進めるんですよ」

＃蛍

「…分かった…。じゃあな」

#千秋

「あ！ちょっと！待ってください！」

有栖川千秋の声を背後に聞きながら、オレは114教室を後にした。

　　　　　　　　　　　　　　　Chapter2－3

＃蛍

「ごめん、光。昼食食べる時間、短くなって」

＃光

「別にいいよ。オレが蛍と食べたいだけだから。

ところで学級委員、どうだった？大変そう？」

＃蛍

「パートナーとか組まされた。めんどくさそうだ…」

＃光

「蛍が委員会とかやるの、珍しい」

＃蛍

「できるだけ、そういうのはやりたくないからな、面倒だし」

＃光

「でも、どうしてもって言われて引き受けちゃうの、蛍っぽい」

「なんだかんだで、優しいよな、蛍は」

＃蛍

「別に、優しくなんか…」

＃光

「でも、無理はするなよ」

＃蛍

「無理なんてするわけないだろ…」

Chapter３－１

朝

＃光

「おはよう、蛍」

＃蛍

「…はよ」

＃光

「今日も学級委員の集まりがあるの？」

＃蛍

「いや、今日はない

けど、ホームルームで学祭について話さないといけない」

＃光

「そっか。学祭ももう二か月後か。うちの学祭、六月だしね

そういえば、他のクラスが出し物を決めて準備しているところを見たな」

＃蛍

「…学祭…めんどくさい…」

＃光

「あ、今日、昼に部活の集まりがあるみたいだから、一緒にご飯食べられないんだけど…」

＃蛍

「ああ…、適当に食べるから、大丈夫」

＃光

「適当って、どうせまた一人で屋上で食べるつもりだろ」

＃蛍

「……………」

＃光

「オレがいないときはいつも一人で弁当食べてるだろ」

＃蛍

「うるさい…」

＃光

「ってもうこんな時間か。急がないと、一限に間に合わないな」

＃蛍

「…別に間に合わなかったら、屋上にいればいいだけだろ」

＃光

「授業はちゃんと出ろって言ってるだろ…」

＃蛍

「間に合ったらな」

Chapter３－２

一人で屋上への階段を上る。

屋上の隅を陣取って弁当を食べ始めると、扉が開く音がした。

＃芽依

「あれ、先客がいた」

＃蛍

「………」

＃芽依

「ねぇ、わたしも一緒にご飯食べていい？」

＃蛍

「…勝手にしてください」

＃芽依

「冷たいなぁ…。あなた、何年生？名前は？」

＃蛍

「はぁ……。人の名前を聞く前に、そちらから名乗ったらどうですか…」

＃芽依

「私は木内芽依。三年生だよ」

＃蛍

「…オレは、雨宮蛍。2年B組です」

＃芽依

「へぇ。二年生ね。いつもここで一人で食べてるの？」

＃蛍

「いつもは幼馴染と食べてますけど…」